犬の埋められている場所

——ホーフマンスタールの小説断片『アンドレーアス』の一場面——

荒　又　雄　介

『アンドレーアス』に描かれるケルンテンの章は，主人公による回想場面であるが，そこに反省や解釈は一切差し挟まれない。語りは一貫して独立した物語平面を維持している。それにもかかわらず，この物語平面は安定した現実を形作っているわけではない。そこで活動する主人公の意識に幼年時代の記憶が割り込んで膨れ上がってくるからである。思い出された情景の中で，また更なる過去が想起される。しかもその際，奇妙に似かよった出来事が，数々執拗に繰り返され，テクストはあたかも記憶の迷宮のような様相を呈している。

作品中，記憶の情景はいわば入れ子式に組み合わされている。しかし，その性格は一様ではない。ヴェネツィアで思い出されるケルンテンの一連の場面は，時と場所が特定されたひとまとまりの時間の連続であって，描き出される事物も明瞭な輪郭を保っている。これに対して，ケルンテンで想起されるのは，幼年時代の印象的な一こまのこともあれば，複数ある記憶の複合像のこともあり，主人公の意志の制御を受けずに浮かび上がるこうした情景が，過去の事実をそのまま反映したものなのかどうか疑わしいこともしばしばである。これに夢や白日夢の中で垣間見られる情景が加わって，記憶の像は主体の意志の圏域を大きく逸脱するに至る。記憶の入れ子は，重なり合うに従って，主人公の意識のより深い層を掘り起こし，若い貴族の教養旅行を期待していた読者は，知らぬ間に，不可思議な映像を辿りながらの時間的遡行を余儀なくされるのである。

こうして折り重なる記憶のきわめて深い場所に，死んだ犬のイメージは埋められている。旅先で遭遇する番犬の死と埋葬を契機に，このイメージは主人公の脳裏に掘り起こされてくるのだが，それは他の記憶像とも照応し連鎖をなして，作品の時間軸に沿った進行とはほとんど別個に展開される。この展開を追ううちに，読者は主人公の克服されない幼年時代に行き当たり，未整理のまま癒着し合う幻惑的な映像を目の当たりにすることになるのである。本発表では，犬のイメージの背景に，解決されることなく埋葬された過去の記憶が錯綜していることを確認し，同時に作中に暗示されている幼年時代の読み替えの試みについても言及した。

また，記憶のあり方のもう一つの例として，文書による記録が描きこまれていることにも注意を喚起した。一貫してものを書く人として描かれる人物サクラモッゾは，作者の構想では主人公の精神的指導者の役割を果たすはずであった。そこに響く「塔の結社」(ゲーテ) の文書館の残響は，創作ノートの断片にわずかに聞き取られるばかりだが，それはさておき，サクラモッゾの書類に主人公が一度かかわるやいなや，頁の取り違えや代筆といった混乱しか生じない事態を見れば，この後迷宮都市で展開される主人公アンドレーアスの冒険の首尾一貫した成就が，どうやら容易でないことだけは，作品が断片として途切れていても，十分感得されるのである。